

## 巨大な古墳を築き、海外とも交易した筑紫君磐井

八女丘陵上には、4世紀から7世紀にかけての古墳約300基が築かれており、八女古墳群と呼ばれています。その中心をなす北部九州最大の前方後円墳、岩戸山古墳(国指定史跡)は筑紫君磐井の墳墓とされます。磐井は6世紀前半頃に八女地方を治めていた古代豪族で、大陸や朝鮮半島との独自の交流ルートを持ち、繁栄をきわめていたとされます。しかし、継体天皇の時代、朝鮮半島出兵への軍事負担を強いられた九州の豪族たちは磐井を盟主として、527年にヤマト王権から独立し、郷土を守るために乱を起こしました。古代史最大の戦いとされる「磐井の乱」です。

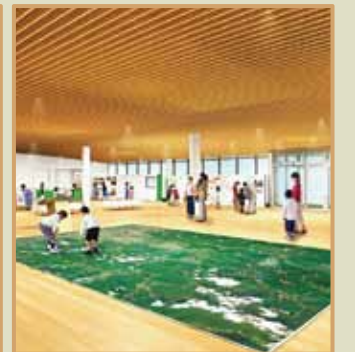
戦いは1年半も続きましたが、結局、磐井はヤマト王権の軍勢の前に敗れてしまいます。しかし、その後も息子の葛子を中心に、磐井一族は健在だったようで、鶴見山古墳など大型の古墳が次々に築かれます。八女古墳群周辺からは、石人・石馬や鉄製武器、埴輪などが出土しており、それらを収蔵する岩戸山歴史文化交流館(仮称)を現在建設しています。



岩戸山古墳



竪穴住居(復原)



岩戸山歴史文化交流館(仮称)

# 悠久の歴史



八女という地名は、矢部村の八女津媛神社に祀られている女神から取られました。岩戸山古墳など、多くの古墳群があることから分かるように、八女市周辺は古くから繁栄しており、古代史の大事件である「磐井の乱」の舞台ともなりました。また、南北朝時代にも動乱の舞台となり、八女で亡くなったとされる二人の親王は、今も地元の人たちから慕われています。

## 悲劇の二親王と南北朝動乱のドラマ

皇室の正統を争って、60年にも渡り全国で戦乱が繰り返され、南北朝時代。北部九州は南朝側の重要な拠点の一つになり、八女でもさまざまな歴史のドラマが生まれました。

後醍醐天皇の第16皇子、懐良親王は征西将軍として九州に派遣され、北朝方に打ち勝って、大宰府に征西府を置きました。その頃から親王はたびたび星野を訪れていましたが、北朝方に敗れてからは星野で養生に専念し、大円寺で仏道ごまの日々を過ごしたとされます。大円寺には親王ゆかりの品々を収蔵する資料館があり、星野の空谷山には墓所が建てられています。

懐良親王から征西将軍を受け継いだ甥の良成親王も、失地を回復することはできず、矢部でその短い生涯を終えました。親王お手植えのイチヨウや大藤など、八女にはゆかりの場所がたくさん残されており、宮内庁が認定した御墓所も大仙御所にあります。親王につかえた五條家が代々陵墓を守っており、毎年10月8日の命日には御霊を慰める「大仙公園祭」が行われます。

五條家には天皇綸旨や武家文書など、南朝方の動向をうかがい知る「五條家文書」(国指定重要文化財)が369通残されています。



懐良親王御墓所



大円寺



大仙御陵墓